

定住化施策下における遊牧民の生活様式の変容に関する考察

— 青海省におけるチベット族遊牧民の事例を中心に —

韓 霖

Changes brought about by policies to settle nomadic people

— with special reference to the Tibetan nomads of Qinghai Province —

Lin HAN

Abstract

This paper discusses changes in nomadic culture brought about by settlement policies. Although settlement of nomads is based on policies to solve both the environment problems in nomadic areas as well as poverty issues amongst the nomadic people, it is the impact of the implementation of the policies that causes changes, not only economic, in nomadic life and culture.

These changes, not only the loss of the dynamic nomadic lifestyle brought about settlement, can also be seen in food culture, livestock management style, and moving away from livestock-centred lifestyles. In short, the continued existence of nomadic culture is brought into question.

- 1 はじめに
- 2 調査地の概況と調査方法
- 3 遊牧のサイクルと伝統生活の成り立ち
 - 3-1 仔畜の育成に向け
 - 3-2 暖営地への移動
 - 3-3 冷営地への移動
- 4 家畜をめぐる日常生活とその変容
 - 4-1 家畜の構成と利用
 - 4-2 家畜をめぐる管理様態
 - 4-3 家畜構成の変化とそれによる生活様式の変容
- 5 簡素な食生活とそこにみられる変化
 - 5-1 伝統食生活の成立と家畜の位置づけ
 - 5-2 食生活に見られる変容
- 6 結語 定住化と伝統生活の存続

1 はじめに 課題設定

本論文は、中国における遊牧民に対して実施されてきた定住化政策によって、もたらされた遊牧社会の変容について考察するものである。

これまで、多くの先行研究は、遊牧社会とその変容をめぐる様々な視点から論じてきた。これらの研究においては、遊牧社会の変容に関して主に近代化、市場経済化及び遊牧民の定住に伴う家畜の移動範囲や方式 [小長谷2007；今岡2005] 及び居住集団・コミュニティの変容 [風戸2006；尾崎1998] と、そうした変容によって、もたらされた家畜構造の変化 [小長谷2007] から展開されてきた。その一方、生活様態について儀礼、信仰、結婚、食、家畜の去勢などの面で紹介し [小長谷1992；1996；1997]、遊牧の空間、移動方式、家畜管理などの側面から論じている [松原1983] ほか、中国の遊牧地域の環境問題と定住化の必要性をめぐる、従来の生活様式を生態学的側面から論じる研究は数多かった。しかしながら、上記のいずれの研究も遊牧民の日常生活様式の変化には言及していないといえる。

遊牧業は遊動的牧畜業である。家畜の飼養を中心的な生業としていて、かつ遊動生活をおくることが、この生活様式の2つの不可欠の要素となっている [松井1999：493]。いわば、その日常生活は、主に家畜をめぐる生活様式と遊動的な生活様式により構成されていると思われる。だが、定住に伴い、遊動という生活が消えてしまうことが可能であっても¹、家畜が存在する限り家畜をめぐる生活様式は、決して完全に変わることはないのではないかと、あるいは無くなるのではないだろうか、ということが本稿の課題となる。少なくとも、所有の家畜（数量の多少を問わず）が存在する限り、自家消費の食生活及び子どもの就職構造などがある程度守られている [韓2010]。これは、彼らの生活にはこうした家畜をめぐる重要な独自の局面が存在することを指している。

いうまでもなく、遊牧民の定住は、あくまでも遊動が失われつつあるのみならず、家畜の減少や、喪失をももたらす。そのみで遊牧民の生活に大きな影響を与えたと考えられる。本稿は、家畜をめぐる生活様式の変容に着目し、遊動という生活様式の変化に伴い、こうした生活様式がどの程度の変化にとどまっているのか、といったことについて家畜をめぐる利用や管理及び食生活などの側面から明らかにすることを目的とする。

2 調査地の概況と調査方法

本稿では、事例対象地として、青海省における遊牧民の定住によりできた、果洛新村（以下A村と言う）と智格日定住区（以下B村と言う）を取り上げる。図1に示したように、A村は果洛州瑪多県の黒河郷と黄河郷における遊牧民の定住によりできた村である一方、B村は黄

1 環境問題の解消を目的とした、青海省におけるチベット地域遊牧民の定住は、定着的な農業及び家畜を畜舎飼育にする固定式牧畜という定着的な生業や生活への移行を余儀なくされることを指す。なお本稿でのB村は、季節的な休牧という方針のもと、定住地が確定されるが、時期により家畜飼養は従前同様で移動をおこなっている。この意味で「半定住化」と呼ぶほうが正確であるが、ある程度遊動的な生活様式はまだ存続している。

南州に属する沢庫県寧秀郷智格日村の一部の遊牧民の定住によりできた地域社会である。現在、二つの村は約2 km 離れているが、ほぼ同一地域に属している。

二つ村の造成や建設費は、すべて国家補助金によるものであるが、A村の建設費は8万元/戸に対し、B村はその40%しかなく、3.5万元/戸となり、生活補助金(A村：8,000元/戸・年；B村：3,000元/戸・年)もほぼ同様の状況にある。造成基準からみれば、A村は、189戸のうち、161戸において住宅=63.1㎡、庭=1,037㎡、畜舎/温室=100㎡であるほか、28戸においては2階建住宅=81㎡、庭=252.3㎡となる。一方、B村の100戸はほとんどが住宅=60㎡、畜舎/温室=100㎡となるが、A村とは異なり、完全に放牧を禁止することはなく、家畜数の減少と草場の回復を目指して、季節的放牧が認められているため、飼料栽培用の農地=3.3ha/戸も与えられている。

さて、A村の転入は、2006年末に始まり、現在189戸・731人の定住民を有する。同徳県から東22kmのところの位置し、建設面積が368 haである。そこは西寧 果洛、西寧 同徳、西寧 黄南州(沢庫県、河南県など)、同徳 黄南州などの道路の交差点であるため、交通の便がよい。その一方、所在地は中国で最も大きな牧草の繁殖基地——青海省牧草良種繁殖場にあり、良質な牧草がいつでも安く買える。しかも、同徳県府でいくつかの市場と家畜の集散地が設置されているため、農・畜産品の売買が便利である。

図1 事例調査地の位置図(青海省地図²により筆者作成)



注：矢印「----->」は転出地から転入地へ、を意味する。

一方、B村は寧秀郷智格日村の一部の牧民を定住させる形で作られた移民区である。智格日村は人口が205戸・843人で、その内、128戸・630人が定住の対象に指定されているが、2004年から現在まで100戸しか定住していない。A村と隣接しているが、A村とは異なり、交通の要衝のみならず、一般道路からも2、3 km 離れている。また郷府近郊であっても、周囲はすべて草原であり、人口と流動人口も非常に少ない。しかし、A村と同じように、休牧時期でも、畜舎飼育や家畜の販売も容易である。

2 <http://www.onegreen.net/maps/m/qinghai.htm>. 2009年11月6日。

本稿の調査は、2010年7月2日～8月14日まで1ヵ月半、A村とB村のそれぞれ20人の世帯主と、A村の支部書記、主任に聞き取りを行ったうえ、黄河郷にいる、まだ遊牧を行っている1世帯（1日半）とB村の夏营地で放牧している3世帯（2週間あまり）に滞在し聞き取りや観察を行った。質問はすべて漢語（中国語）で提起し、通訳者により通訳してもらった。調査の時、S氏（チベット族、青海省牧草良種繁殖場民族学校校長；A村、B村とB村の夏营地）とD氏（チベット族、果洛チベット族自治州人大常委会役人；黄河郷）を通訳者としてつれて調査を実施した。

3 遊牧のサイクルと伝統生活様式の成り立ち

本章は、果洛チベット自治州の遊牧民の生活様式を例にして、定住民（A村）に対する聞き取り、牧民たちの記録及び先行研究により、定住前の生活様式をとらえることにする。だが、調査地とする二つの村は、標高の差により定住前の遊牧活動に多少差異があることは明白である。その一方、定住前のA村の各世帯が所有する草地は、一般に、夏营地 秋营地 冬春营地と、夏秋营地 冬春营地といったように分けられるが、多くの農家は、暖かい夏秋营地と寒い冬春营地のように利用している。本稿では、両者をそれぞれ暖营地と冷营地と言うようにする。

3-1 仔畜の育成に向け

旧暦の1月中旬～2月（本章の以下で提示する月順はいずれも旧暦上の時期を指す）は、ヒツジとヤギの出産に向け、冬营地から産羔地（子畜を産む地）へ移動する時期である（移動せずに冬营地をそのまま仔畜を産む地にする世帯も存在）。冬营地の選択は、とりわけ冬营地を産羔地とする農家にとって、5ヵ月ほど生活し続けるため、草場の牧草生産量が高い一方、風も少なく、川の水も凍結しにくいといったことなどが必須条件となる。

この時期には、各世帯が家畜の分娩に向け、畜圏（家畜を囲むもの）の補強を行う。畜圏というが、いずれも乾かした「芝生の塊」³あるいは、ヤクの糞塊で囲んだものを指す。牧民の話によれば、それは、金銭的にも人力的にも便宜的である一方、風を避けるか、風に向けるかというように壁の高さを調整することを通して圏中の温度も調整できるという。しかも、畜圏の中にヒツジの糞を敷いて地面の寒気も軽減できるという。

調査地の母ヒツジとヤギは、通常受胎から分娩まで5ヵ月あまりかかり、1年に1頭の仔畜しか生まれないという。分娩期に入ると、放牧の移動範囲は、テント地から遠く離れず、群もメスとオスに分ける。そのうえ、母ヒツジの背中と腹部を一枚の布でゆるく包む。それは、放牧中に生まれた仔ヒツジが布の中に落ちることができる一方、ヒツジらに踏まれることも避けられるからである。

一方、母ヒツジ（とりわけ初めて仔を産むヒツジ）は仔ヒツジに哺乳しない場合が多かったので、その時、女性の牧民は、母ヒツジをつれて哺乳させる。ヒツジの分娩は夜のほうが多く、仔畜の死亡を避けるため、男の牧民は夜の間よく群を見回る一方、分娩する母ヒツジの多い夜

3 草の生えている土を厚く切ったものである。

には、世帯全員が一晩中群のそばで見守るという。仔ヒツジが生まれた後、牧民は乾燥したヒツジの糞の粉で仔ヒツジの体を拭う。それは、ヒツジの糞の粉が柔らかく仔ヒツジを傷つけにくい一方、湿気を吸収しやすいからである。その一方、仔ヒツジを保温する措置として、通常フェルトで包む、仔ヒツジを抱いて体温により暖める、オンドルの上に置く、袋に入れるなどの方法をとる。

一般に、仔ヒツジは半月ほどを経てから、母ヒツジに従い付近の草場で草を食べ始める。その前には、母ヒツジにより毎日2～3回ほど哺乳される。母ヒツジがあまり哺乳しない時や、母ヒツジが死亡した場合は、牧民が乳に少しツァンパ⁴を添加して、哺乳ビンで仔ヒツジに乳をあげる。だが、牧民は初乳を、仔ヒツジに飲ませずに絞り出す。それは、仔ヒツジが初乳を飲むと、下痢になったり、死亡したりしやすいからだという。

さて、3月初めごろは、春営地に入る時期であると同時に、3月になると、ヤクの出産時期にも入る。母ヤクは、一般に懐胎期が8ヵ月で、2年に1回の出産で、1頭の仔ヤクを産む(牧草状況及び母ヤクの体質により、1年1回出産の場合もある)。ヒツジの分娩と同様に、牧民はフェルトや牛糞の粉で仔ヤクの体を拭った後、フェルトで包んだり、あるいはテントに入れることにより、寒さに凍えることを防止する。

調査地の牧民は、仔ヤクの哺乳量を守るため、出産したばかりの母ヤクを搾乳しない(一般に仔ヤクが2ヵ月になってから、開始)。一方、ほとんどの農家は仔ヤクを入れる施設を持っていないので、気温が下がるとき、仔ヤクを成年ヤクの囲いに入れ母ヤクに従わせるのみである。仔ヤクは14、15日後、母ヤクに従って草地で草を食べることができるようになる。

3-2 暖営地への移動

5月には、すべての牧民が夏営地(4～5ヵ月ぐらい滞在する)に入るが、夏営地へ移動するのは、3月末～4月初めごろに始めるのである。移動といっても、生まれたばかりの仔畜の移動が緩慢なので、あくまでもゆっくり歩く、ゆっくり駆るという様子である。移動中、天気良く風の弱い日には、牧民は通常、近くにある水と草の良いところで一時的に放牧を行うが、仔畜及び体の弱い家畜の世話は、女性たちにより行われる。

5月中旬に入ってから、ヤクに対する搾乳が増え始まる。それは、これまで仔ヤクの哺乳量を確保するため、搾乳をあまりしてこなかったからだ。ヤクの搾乳は3ヵ月間続けるという。調査地では、ヤギ・ヒツジに対する搾乳はあまり行われなく、ヤク乳しかほぼ飲まない伝統習慣がある。ヤギやヒツジを搾乳するのは、母ヒツジが死亡した仔ヒツジに乳をあげる時か、あるいは保有する母ヤクの数少なく、家族の食用乳が足りない世帯に限られている。

ヤクを搾乳する際に、母ヤクを順番に1本の長いひもに繋いで、女性はヤクの右側にしゃがんで、両手を交替しながら乳を搾りだす。そのとき、入れ物は両足の間または脇の下に挟んでいる。入れ物は、ヤクの角が伝統的な道具となるが、定住後は、市場で買ったバケツなどに代わった農家が多くなったという。

そして、5月末～6月に、仔畜がだんだん大きくなると同時に、家畜に体力をつける必要も

4 裸麦を炒って粉にしたもの(麦焦がし)で、チベットの人たちにとって主食となるものである。

あることから、牧民は群を駆って引越を頻繁に行う。この時期の家畜は古い毛がすでに長くなり、カシミアもでてきた一方、天気も暖かくなっているため、毛やカシミアを刈りとっても、家畜は寒気がしないため、カシミア取りとヤクの毛刈りは重要な仕事となっている。カシミアを取るのは、ヤギを横に倒して熊手のような道具で、背中から腹へという方向に沿ってかき寄せる。カシミアは通常自家用としてはあまり使わずもっぱら販売している。

これに対し、ヤクの場合は、通常長毛、絨（短くて柔らかい毛）、鬣と尾に分けて刈る。短絨は熊手でかき寄せる以外、いずれもナイフで刈るか、棒に巻いて引き抜くのである。だが、当年に仔を産んだ母ヤクの長毛は刈らない一方、荷物を背負い運ぶ駄畜ヤクについては、腹帯を締める部分と膝の長毛は刈らない。そのほか2～4歳の仔ヤクは、毎年鬣を引き抜くが、3歳の仔ヤクがはじめて尾の毛を刈られ、絨をとる対象となるのは1歳以上のヤクということになる。

ところで、7月になってから、家畜は青草を食べて次第に強くなる一方、天気もよくて女性や子どもも一時的に放牧を行うようになる。通常、男の人たちはこの時期を利用して、カシミアの販売に向け、頻繁に州府県庁所在地あるいは地域の販売集散地——野牛沟にでかけて、やみ商人と連絡を取る。チベット族の牧畜地域にやってきて、カシミア、皮および家畜生体などを買い付ける商人の多くは、商売に堪能とされる回族だという。

8月に入ると、1年1回の羊毛刈りが始まる。羊毛刈りの時期になると、家族・親族世帯あるいは草場が隣接する世帯の間では、時間を少しずらし、1世帯ずつ、他の世帯が協同して行う。筆者がC村の夏営地で見たように、チベット族牧民の羊毛刈は、まったくはさみを使わず、両側に刃がついてあるナイフで毛を刈り取っている。彼らの話によれば、熟練した人は、1日³⁵～50頭のヒツジ（あるいは20頭ぐらいのヤク）を刈ることができる。

その一方、ここまで春・夏の季節を通して新しい牧草を食べてきたヤクやヒツジはすでに肥えている。牧民たちは羊毛刈り後、冬営地への転入前に、一部の家畜を販売する。この収入は毎年最も主要の現金収入となる。販売は、牧民が自ら家畜を駆ってやみ商人と価格を相談し販売することが多いが、家畜皮を販売する世帯は多くなく、家族の服を作るのに使うことが多かったという。とはいえ、販売といっても、むしろ日常生活の必要品の取得を目的としている。ここでA村のK氏（男・53歳）の話をみてみよう。

「定居前、うちは持っていた家畜数が多かったときには、ヤク83頭、ヒツジ400頭であった。遊牧時、毎年ほぼ同じように、30～40頭ぐらいのヒツジ、3、4頭のヤクを売り続けてきた。もし、今も放牧しているなら、売る数はその程度だろう。その時期家畜の値段が徐々に高くなったが、家族の生活と生産から考えれば、それ以上売らないほうがいい。家畜を売る収入は、これから半年の食糧、生活用品、例えばツァンパ、小麦粉、お茶、子供の衣服などが買えれば充分である」。

すなわちK氏が述べたように、チベット族牧民にとって家畜の販売は、家畜群の規模と群構造を維持する【小長谷2007】一方、ある程度の現金を手に入れ、家族生活の日用品や冬を過ごすための食糧を買う——生活需要のためで、最大の経済利益を求めることではない。

3-3 冷営地への移転

通常9月に、牧民たちは秋営地に入るが、9月末～10月初めは、各世帯が秋営地から徐々に冬営地（通常11月初めごろに冬営地に入る）へ移動していく時期となる。女性たちは、この時期を利用して家族全員の冬季の衣類（綿入れの服・靴・帽子など）を準備しておく一方、冬営地にある「芝生の塊」あるいは、牛糞でつくった圏が風に倒されないように補強することも行う。

さて、農耕地区の収穫季節は——秋とは異なり、高原牧畜区の収穫季節は初冬——11月末～12月初めである。チベット族牧民は、冬が近づくにつれ越冬に必要な食糧品の準備——「冬宰（冬に家畜を屠ること）」を行う。この時期の家畜は、夏から秋にかけてたっぷりと牧草を食べて、一年中で最も肥えている時期である。しかも冬に入ると、多くの家畜を屠殺しても腐りにくい一方、大量の肉を食べ、肉を煮込んだスープを飲むことにより、野外で放牧をしても凍えないため、牧民たちはこの時期を選択し、たっぷりの家畜を屠り、越冬のみならず、翌年の夏と秋で食べる肉（5章で紹介する風乾肉を指す）をもある程度準備しておくのである。

家畜屠りや皮剥ぎは男性が担うが、内臓、肉などの片づけ及び料理作りは女性の仕事である。G.A. Combe はチベット族地域における家畜を屠る方法に関して「彼らは、食物の獲得に奇異な、牛を屠る方法を持っている。1本の皮製ベルトで牛の鼻と口をしっかりと縛って、牛の目が突き出るまで窒息させる。それは一般30分ほどかかる」⁵と述べている。

この屠り方は、今まで調査地で依然としてそのまま踏襲されてきた。それは、ナイフで家畜の体に突き刺すことではなく、家畜の口と鼻を閉じて息を詰まらせるのである。家畜の息の根が止まってから、屠る人は家畜の胸にナイフで1つの小口を作り、手を入れて指で心臓の大動脈を断ち切り、血を胸腔に流させるのである。チベット族の人々の間では、この屠り方が最も文明的な屠り方とされる。いわば家畜が活着しているとき、血がみられない一方、皮剥ぎや、内臓を洗う際に血もあちこちに飛び散らないからだという。

この屠り方について「それは、ただ人々が食の好みを満たす手段であるに過ぎない。チベット族牧民は、すでに肉に血が留まっている肉食に慣れていてから」⁶という指摘もあったが、それは、生存のために食肉を手にいれる必要があるという現実と、生き物を殺すことを禁じる仏教の信仰とをともに満たす1つの有効な方法でもあると考えられる。

これまでみてきたように、チベット族牧民たちは、冬営地の時期と家畜が仔を産む時期には、移動せず、長時間一か所に居住している。それ以外の時期において、自家用の草場の状況の変化に基づき家畜を駆って、絶え間なく移動し続ける。移動中の滞在は、短い場合が一週間、長いほうが二週間前後で、テントを外して次の草地へ転出する。それは、家畜に十分な牧草を食べさせるためのみならず、過度に草地の草がかじられることを防止するためでもある。いわば生態のバランスをとっている生活・生産様式である。

5 G.A. Combe's A Tibetan on Tibet ((訳書名『藏人言藏：孔貝康藏闻见录』), 邓小咏译, 四川民族出版社, 2002年, p.90.

6 苗凡卒「冬宰——藏北草原的黄金季节」『中国西藏』1994年第1期, pp.17-19.

4 家畜構成・管理とそこに見られる変容

家畜は、「青蔵高原」⁷という霜の降らない日がほとんどない地域で暮らしているチベット族牧民にとって、単なる生産手段にとどまらず、生活手段として位置づけられる。それは、野菜の欠如のほか、酷寒や風雪に抵抗するカロリーも家畜の肉や乳製品にしか求めないのと同時に、家畜は、寒さを制御し体温を保つ毛や皮も与えてくれる。いわば家畜は牧民に最低限の生活・生産手段を直接提供し、彼らの自家消費経済システムを維持してきた。

4-1 家畜の構成と利用

チベット族牧畜地域で飼っている家畜は、4種類で、チベットヒツジが最も多い、次はヤク、ヤギとウマという順番になる。

ヤクは、標高が3,000~6,000mという酷寒な高原で生きていく独特な牛品種である。他種の牛と比較すれば、体の両側、胸及び腹と尾の毛が稠密かつ長く、四肢が短く強いのが特徴となる。習性は粘り強く粗野で、通常マイナス30~40 という厳寒の環境で生きていけるのみならず、6,400mの山頂まで草を食べに登り、草丈の低い牧草及び毒性の雑草までも食べられるといわれる。牧民の日常生活には、ヤクが幅広く使われている。それは肉、乳、皮、毛などを与える一方、去勢されたオスヤクも、駄畜として用いられている。さらにヤクの毛は、チベット族のテントをつくる原料となり、糞も日常の燃料とされている。

調査地のヒツジは、当該地の地理と気候条件に適応し、背が高く体が頑強なチベットヒツジである。チベットヒツジ（以下で、ヒツジという）は湿気と暑さに弱い、耐寒な習性、病害に強い体質は、高原地域で生きていく能力を備えている。その一方、攀じ登りが得意という性格に加え、唇が薄くて短い牧草のみならず、氷雪に覆われた草地でも、積雪をかき分けて牧草をかじり取って食べられるという。ヤクと同様ヒツジも、牧民の日常生活に欠かせない肉を供給するほか、その皮はチベット族民族服「蔵袍」⁸の原料となり、その毛もプル（羊毛の織物）、袋、ロープなどの生活品に幅広く用いられている。

だが、チベット族牧民が飼っているヤギは、それほど多くない。それは、ヤギの乳や毛及びカシミヤの産出量が少なく、肉の産出量も低いのに加え、肉は生臭みが強く、筋も多いので、日常食の食肉になっていないのが要因だと考えられる。しかし、A村のK氏（女、46歳）の話によれば、その原因はそこにとどまらないことがわかる。

「うちは、主にカシミヤをとって売るため、ヤギを飼っていた。その肉はおいしくなく、乳も生臭みがするので、食べない。定住前は、カシミヤの値段が高くなったが、牧草の根までも食べられるだけでなく、ほかの家畜に登れないところまで登って草を食べるので、草地に対す

7 青蔵高原は、中国の南西部にあり、青海省と西藏（チベット自治区）という両地方の略称——「青」と「蔵」をあわせて称されたものであるが、それは、青海省とチベット自治区の全域のほか、甘肅・四川と雲南省のそれぞれの一部チベット族地域も含まれている。面積は約200.64万km²（全国総面積の20.9%）で、平均標高が4,500mである。中国科学院地理研究所经济地理研究室編著『中国农业地理总论』、科学出版社、1980年、p.413。

8 チベット族牧民の生活と文化が生んだ、独特な衣類である。地域によって多少違うが、基本的には、長袖の短いシャツの上に大きくたつぷりした長袍（蔵袍という）を着る。着る時はベルトをしめ、懐中に、ツァンパや、子供まで中に入れることができる。休む時は、全身を長袍で包みこんだようにして寝る。

る破壊が比較的大きくて、多く飼わない。実は、ヤギを多く飼えばカシミアによる現金収入が多くなるが、行動が活発、敏捷で、あちこちへ暴走するので、政府（郷・村政府）も、ヤギの飼養に、反対しないが、奨励することもない。

つまり K 氏が述べたように、カシミアにより牧民や地域に一定の経済的利益がもたらされるが、ヤギの習性により草地の大きな破壊をもたらすことは、飼養数が少なくなる 1 つの要因であるとも考えられる。

ウマは、チベット族牧民の飼った家畜の中で最も少なく、主に交通手段とされている。それは、モンゴル族遊牧民のような搾乳家畜になっておらず、かつ牧草の需要量もヤクとヒツジより多いからである⁹。そのため、もともと牧草の産出量が低く、草丈も低い高原草地では大規模な馬群を飼うのは、生態や自然環境に適さないと思われる。

草場利用という視点から、チベット族牧民の家畜構成について、南は「草場では、単に 1 種の家畜を飼養すれば、牧草の利用率が非常に低く、牧草の浪費も大きかった。しかし、ウシ、ヒツジ及びウマを混合して放牧すれば、比較的よい効果もたらされる。各類の家畜の市場価値及び労働力の投入を加えてみれば、合理的な家畜構造として、ヒツジ 80%、ヤク 17%、そしてヤギと馬 2 ~ 3 % というのは最も適切である」¹⁰と指摘している。

1952年の統計によれば、当時果洛州全域の家畜数は、146万7,100頭だった。その内、ヒツジが54.9%、ヤクが41.8%、そしてウマが2.1%、ヤギが1.19%を占める¹¹。その一方、定住前の A 村の世帯の家畜構成からみれば、比較的貧困な G 氏はヒツジが47頭、ヤクが14頭、馬が2頭とヤギが0頭であるのに対し、経済的に豊かな H 氏はヒツジが380頭、ヤクが80頭とヤギが21頭、馬が9頭となる。すなわち調査地の家畜構成についてみれば、格差はたいして大きくない。いわば家畜群の構成は、生態学、経済学及び遊牧文化などに基づいたものである。

だが、家畜の利用は、以上にとどまることなく、5章の食生活にも幅広く表れている一方、日常の生産・生活活動で使った様々な道具にも見て取れる。例えば、ダズェオカイ：ヤク皮あるいはヤクとヒツジの毛で作った、ウマの歩幅を狭くするロープ、オエドォ：ヤクとヒツジの毛で編んだ放牧用の鞭、ドザカイ：ヤク・羊の毛で編んだ、馬をつなぐロープ、ジュモ：ヤク角の先端部あるいはヒツジの大腿骨で作った指ぬきなど、広く使われている。

4-2 家畜の管理

トルコ系のユルック遊牧民の、夏秋季節にある夜間放牧の習慣 [松原1983] に対し、チベット族遊牧地域は、夏季は朝早めに出て夕方遅く戻り、冬季は朝遅く出て夕方早めに帰るという伝統習慣となる。それは、夏は気温が暖かく、家畜に朝露の付いている牧草を食べさせるため、夜あけに家畜を出して放牧に行く一方、夕方にも、家畜にいっぱい食べさせなければならないので、日が沈む直前に家畜を駆って帰るからである。夏に対して冬は、天気がきわめて寒く、

9 ハリスによれば「牛とヒツジは食物を反芻する動物であるが、ウマは異なり盲腸で繊維性の食物を消化するので、牧草を消化する有効率が、牛とヒツジの 2/3 しかなかった。しかも、ウマは、活動的な動物で、新陳代謝率が高い」ということである。[ハリス1988 : 110-111]。

10 南文淵『高原藏族生態文化』甘肅民族出版社、2002年、p.112。

11 邢海寧『果洛藏族社会』中国蔵学出版社、1994年、p.69。

風も強くなるので、朝早く出て行けば、牧草の上の霜がまだ残っている。そのため、太陽が出て、霜が溶けてから、家畜を風が当たらない坂や谷へ駆って放牧を行う。同じ理由で夕方も夏より早くテント地に戻るのである。

さて、調査地の放牧は主に、2種類に分けられる。1つは、各世帯が自家の家畜を、種類、性別あるいは仔畜と成年畜という基準でそれぞれの群に分けて放牧する。もう1つは、ある関係の数世帯が、家畜を共同で大きな群にまとめた後、上述の分け方で混合した家畜群をそれぞれに分けて、各農家が分担して放牧する。この方法は、「従来居住地が比較的集中する近隣あるいは親族・家族間に存在した方法」¹²であるが、草場・家畜の経営が請負われるようになって以降、主に兄弟、親子などの家族・親族関係にしか存在しない。

まず、種類による分別とは、ヤク、ヒツジ及びウマをそれぞれの種類群に分けることを指す。家畜の習性により、ヤクの放牧はヒツジより楽だという。それは、ヤクが暴走することがなく、夕方にも自らテント地に向かって戻るからである。それゆえ、ヤクを放牧する際は、個別のヤクが牧草を食べることに執着し、群にはぐれ迷子になることに注意を払うのみである。

ヤクに対して、ヒツジを放牧する際に、牧民は一日中群を見守る。それは、野獣の襲撃を防ぐ一方、ヒツジはちょっと驚かせただけでも周りへ暴走するからである。そのため、群れの規模の大きさにより放牧の人数も違う。だが、特にウマを放牧する人はいない。通常、ウマを草場にそのまま放しておき、数日後家族のだれかが1回草場へ見に行くのみである。

そして、性別による分別は、主に種付けの把握と肥育を目的とする。それは、メスとオス（とりわけヒツジの場合）を1つの群にすれば、常に互いにおいかけ、体重が減りやすいのである。そのため、ヤクやヒツジの発情時期に、性別で別々の群れに分ける一方、家畜の生殖管も一枚の布で遮り、交尾を避けるのである。また、仔畜と成年畜の分別は、生まれたばかりの仔家畜を成年畜の群れに入れれば、傷を受けやすい一方、仔畜に自由に乳を食べさせると、搾乳量が減り、仔畜も乳を飲みすぎ死亡する恐れもあるからである。

さて、牧民は朝家畜を出す前と夕方戻るとき、家畜の確認を行う。規模がどれほど大きくても、彼らは家畜の細かい特徴に基づいて、どの家畜がいないのかすぐわかる。その熟知度は驚くほどである。識別方法は、主に以下のものである。

ヒツジの場合は、まず頭の毛色や形にある違いで、次は角の形と耳の違いにより区分する。しかし、ヤクの毛色は黒色が多く、単に毛色で識別するのは難しいため、まず毛色の明るさ（真っ黒色か、褐色に近い黒色かまた他色の斑点があるか）により判断する。そして角の形や太さを根拠とし識別し、最後は体の特徴などから識別する。

その一方、数世帯が共同で放牧する場合は、一般に各世帯が自家の家畜の体に特定のマークをつける（通常、角にいくつかの直線を彫り付ける。線に赤・ピンクという色を塗りつける農家もある）。要するに、家畜に対する熟知は、牧民の天賦というよりは、家畜を生活の相手にしてきた牧民たちの家畜に対する愛情の現れだといってよい。

一方、家畜構造の維持や、日常生活の成立につながる家畜の増殖における様々な活動（種畜の選び、種付け、去勢など）にも、チベット族牧民の独特な技術や文化が表われている。

12 丛刊编辑组编『藏族社会历史调查』（三），西藏人民出版社，1987年，p.24。

種畜の選択には、種ヒツジの体が大きくかつ強壯で、毛も長いのが基準となる。種ヤクの毛色は人の好みによるが、体の強壯は前提である。そして、種ウマは強壯であるほか、体形、毛色と走り方も選択条件とする。調査地の農家は、毎年10月ごろすべての種ヒツジの背中に赤色を塗りつける。それは、翌年に生まれた仔ヒツジが元気に生きていくための祈りだという。しかし、群れのなかですぐ種ヒツジを識別できるようにするためということも否定できないだろう。

そして、家畜の種付けは、メスの群れに種畜を入れるだけである。ヒツジの種付けは、7月が最もよく、8月がややよい時期であるが、6月は種付けをしてはいけないとされる。それは、ヒツジの妊娠期は5ヵ月で、6月に交尾すれば、仔羊が寒いかつ草の欠如する12月に生まれ、死亡率が高いからである。通常、100頭ほどのメス群に種ヒツジを2、3頭入れる。

ヤクの種付けは、一般に100頭ほどのメスの群れに5、6頭の種ヤクを入れる。妊娠期は8ヵ月であるため、妊娠させてはいけない時期は4、5月となる。しかし、発情期は若いヤクは早いですが、老いた体の弱いヤクは遅れる上、6月には気温が暖かく、雨水が豊富であると同時に牧草も茂っているので、種付けは6月中旬が一番よく、7月がややよい時期であるという。牧民の話によれば、牧草と水の状況は発情が遅くなる1つの原因でもあり、種付けが遅れたヤクが生んだ仔ヤクの死亡率も高いという。

去勢は、チベット牧民が家畜を肥育し、馴らし及び合理的な群れの規模を維持する手段である。ヒツジを例にすれば、群れの中のオスヒツジの行動が抑えがたく、ちょっとでも油断すれば、どこか遠くに走っていく一方、草地の広さと、労働力の制限からいえば群れの規模は大きければ大きいほどよいというわけでもない。

一般に、ヒツジは5ヵ月になってから、去勢を行う。去勢したヒツジは肥育あるいはふとりやすい。ヒツジの去勢は、1人で行う（一般に、牧民が誰でもできる）。ヤクの場合は、3歳になってから去勢する。ヤクに対する去勢は、ヤクを縛って倒さなくてはならないから少なくとも2人以上が必要である。

表1 A村とB村の各20世帯の家畜所有状況（2010年調査結果により作成）

定住地		ヤク	ヒツジ	ヤギ	ウマ	鶏	ブタ	何も持たず
戸数	A村	0	4	1	0	4	2	13
	B村	16	19	19	16	0	0	0

4-3 定住による変容

モンゴル族遊牧社会に関する多くの先行研究において指摘されたように、民主改革、とりわけ家畜・草地の請負制の実施に伴い、遊牧社会は、遊牧の移動範囲が大幅に縮小され、遊牧方式、基礎組織及び家畜の構成や数量上にも大きな変容がもたらされてきた。いうまでもなく、青海省におけるチベット族遊牧社会もそれにあたる。しかもそれにとどまらず、調査地、とりわけA村の世帯は、定住前に草地の退化や数回の雪害により、家畜を全く持たずに他世帯の委託を受け放牧を行う農家もあり [韓2009]、一層深刻だった。

とはいえ、高原牧畜地域という厳しい自然環境や地理的な閉鎖性による生活独立性の強いチ

ベット族遊牧民の日常生活は、上述のように、家畜の割合及び家畜をめぐる利用や管理などの生活様式に関して、それほど大きな変化がなかったといえる。だが、それを定住後の一部世帯の家畜構造（表1）と比較してみれば、これまで維持されてきた家畜構成の変化は、割合のみならず種類の減少と、単一な種類（A村は家畜を全く持たない農家が多数）に変わった。しかも従来の家畜類に属さない家畜の増加現象までもみせている。

それでは、なぜこのような変化に至ったのか、こうした変化によって家畜をめぐる利用や管理にはいかなる変容がもたらされたかを、以下で具体的な事例から見ていく。

事例1) A-1：男，53歳，4人家族

うちは、転居前，20頭のヤク，114頭のヒツジを持っていたが，すべて売れた。定住なんか，実は今でもわれわれはここに来たくない。仕方がない，政府の要求がある。しかも住宅なんか建設してくれるほか，毎年補助金8,000元や，通学している子どもに対する850元の補助ももらえるんで，補助金に冬虫夏草の採集による収入を加えて，日常の生計が立てられると思った。ところが，燃料とする家畜の糞までも市場で買わなくてはならない今では考えれば，補助金が2万になったとしても，家計も立ちゆかないだろう。

うちは，今35頭のヒツジを飼っている。それはまだ遊牧をしている農家らから買い集めて肥育するものだ。ヒツジを飼うのは，主に家計のために売るが，日常の食にも供給している。ここに来たばかりの時，お金が全然足りなくて，何とかしないとこれからの生活が続けられない状態になって，ついでにうちのお金に親戚からの借金を加えて4万円でヒツジを飼って肥育し始めた。ところが，経験がなかったうえに，お金もあまりないので，飼料¹³（2.2元/キ口）を使わず，草（0.2元/キ口）ばかりあげたので，すべて痩せてしまった一方，温室の暑さで数頭が死んでしまった。それゆえ，儲かるどころか1万円ほどの元金の損害を受けた。それで，1，2頭の乳牛を飼おうと思ったが，市場で売っている母ヤクではない乳牛の値段はすごく高く，買えない一方，ちょっと安くなる母ヤクを買えば，ヤクの習性で畜舎や庭での飼育にそぐわないので，あきらめた。また政府は定住地の農家に乳牛を飼育することを奨励し，乳牛も買ってくれるが，それはわずかの世帯に限られて，うちはその機会に恵まれていなかった。でも，政府が買ってくれた乳牛はいずれも外国からの輸入品種で，われわれがそれを飼う経験がなくて，今考えれば政府の投資に恵まれても，恐らく飼わないと思う。

そのため，あらためて少量のヒツジを買って，ちゃんと飼料を買ってあげて，畜舎の温度も注意しながら肥育をし始めた。去年，3回の肥育を通じて6,000～7,000元の利潤もあった。35頭のヒツジのうち，3頭が買ったヒツジが生んだ仔ヒツジで，これは今年の食肉にしたい。ところで，肥育にかかる日数からいえば，成年ヒツジより当年の仔羊のほうが2ヵ月長くなり，時間やお金はいずれも多くなるので，一般的には成年ヒツジを買う。オスはすべて去勢されたものだ。もちろん，仔羊を買う際に，去勢をする。去勢していなかったヒツジの肉は生臭く，しかも軟らかく煮にくいので，われわれはあまり食べないだけでなく，回族や漢族も食べない。去勢をしないと，売れないよ。売れても，値段はかなり低くなる。

13 販売者によれば，飼料はトウモロコシ40%，裸麦37%，油粕20%及び塩と付加剤3%による。

一方、現在特に種ヒツジを残して種付けする必要もないだろう。種付けすると、母ヒツジを種ヒツジとともに長期に飼いつける必要があるし、仔ヒツジの飼育も長い時間がかかる。しかも以前の草原でそのまま放牧するのと違って、市場で買った飼料や草で飼養するので、時間的にせよ、経済的にせよ無駄だ。だから、買う - 肥育 - 売るというほうがいい。しかも従来と比べものにならないが、多少であってもある程度日常の食肉が提供できる。

事例2) A-2 男, 48歳, 4人家族

うちは、保有する家畜が最も多かった時、ヤク90~100頭、ヒツジ380~400頭ほどだったが、草地の状況がよくないうえに、2回の酷い雪害を受けて、残った家畜はかなり少なかった。ここに来る時すべて売れた。来たばかりの時、生活は主に補助金、家畜を売れた収入と冬虫夏草の収入により支えていた。しかしながら、以前の生活とは全く違って、肉・服・糞・牛乳なんでも市場で買うことしかできないし、かつ値段もまるでウソのように、毎日上がっているみたいだよ。毎日わずかの肉しか食べられないのみならず、牛乳もあまり飲めない一方、豚肉も買って食べている。僕なんかは大丈夫だが、妻が豚肉に慣れず食べないだけでなく、息子もすでに牛肉やヒツジ肉食に慣れたのであまり食べないよ。

仕方がない、生計を立てるためだし、2人の子どもの成長にも肉が必要なので、少なくとも、数頭のヒツジを飼おうと決意した。その時うちは経済的にヒツジを飼う余裕がなく、政府からの投資14,000元と20頭のヒツジにより始めた。今飼っている家畜はすべて自分のお金で買ったものだ。飼ったヒツジは、主に生計を立てることに向けて肥育して売るが、1年にうちは2~4頭を食べる。去年4回の肥育(60~80頭/回)を行って8,000元の収入があった。それはすべてここにやってきた回族に売った。

ここでは成年ヒツジを肥育すれば、80日ほどかかるのに対して当年の仔羊を肥育すると、少なくとも120日はかかるんだ。時間的にも経済的にも成年ヒツジを肥育するほうがいいので、成年ヒツジしか買い集めない。なので、オスはすべて去勢されたものだ。種付けなんかはさらにしないよ。だから、子どもの将来を考えれば、心配になる。大学に進学させ、将来どこかでいい仕事が見つければいいが、できなかつたら、どうしよう。将来政府が、草地で放牧することを認めれば、女の子は何とか家事ができるが、男の子は、放牧するのに必要な技術が何もなくて、放牧もできないかも。なので、子どもは草原で、家畜のそばで育ったほうがいいと思う。

以前は、放牧に便利だし、しかも草原とテントは寒かったので、いつでも蔵袍を着ていた。現在、うちだけではなく、この人たちはあまり着ない。娘の話によれば「デパートや市場で売っている服より、きれいいじゃない。しかも重くて厚いので、部屋で不便だけでなく、熱すぎ」ということで、現在作らない。食べたヒツジの皮も売った。

事例3) B-1 男, 49歳

うちは、ヤク、ヤギ、ヒツジ及びウマいずれも飼っている。今年草地に出ているうちに、畜舎のガラスはうちのヤギにより壊れてしまって、冬になると、どうしたらいいのか、心配している。だから、これからヤギを飼いつけるかどうかはまだ決めていない。うちはヤギやヒツジの乳は飲まないんで、ソユ(ヤクの乳から分離したバター)などもすべてヤク乳にしかよら

ない。しかも草地は縮小されても、放牧の時ずっと1つのところに泊まることはなく、数ヵ月の間で絶えず1つの駐屯地から次の駐屯地へと移動する。移動する際にテントなど様々な荷物はヤクに頼むしかできないから、ヤクはそれほど減少させていなかった。

最も減少したのはウマだ。僕と息子は1台ずつオートバイを持っているので、通常放牧の時オートバイを利用している。ウマは動くのが好きな家畜なので、畜舎で飼育できないだけでなく、庭にも長期間つなげておくこともできない。だが、放牧にウマは完全に使わないというわけではなく、今3頭しか飼っていない。休牧の時、ウマを両親の草地に入れるか、それとも政府の人に見られないように、自家の草地にそのまま放しておく。草地もすでに囲まれているので、他人の草地に入ることを心配する必要もない。

飼っている家畜のうち、ヒツジは最も多い。定住地に転入するとき、一部を販売して減少したが、畜舎の中で、仔羊の死亡率は低くなったので、逆に増えた。だが、仔羊にとって、畜舎飼育はメリットばかりではない。産んだ仔畜は畜舎で長期あるいはずっと生きて行くわけではなく、畜舎の中で2ヵ月ほど経た仔ヒツジは、病害、寒気などに抵抗力が弱くなる。冬の時、うちのヤクは両親の草地に預けて僕も放牧にいつている。

家畜に関する去勢や種付けは、相変わらず以前のように行っている。去勢しないと、管理は難しくなる。畜舎に入ると母ヒツジも大変だよ。以前と違ったのは、家畜の販売数は以前より増えた。それは、畜舎に限界がある一方、今の電気代や子どもの服などの費用が増えたからだ。なので、種付けは重要だ。そうでなければ、これらの費用は誰にももらえないよ。

事例4) B-2 女, 54歳, 6人家族

うちは、ヤギは飼っていない。ヤギは活発かつ敏捷で、ヒツジとともに畜舎に入れたら大変だ。危険だ。ヤクは大幅に減少したが、日常の乳やソユは自給できる。ヤクは畜舎に入れることができなくて、定住時期になると、近くの、他世帯に頼んで草地を借りて放牧するか、それとも政府に知られずに、うちの草地で放牧するしかできない。なので、規模が大きければ大きいほど、謝金とするヒツジの数も多くなり、政府の役人にもみられやすい。

うちのウマは、ここで最も多いんだ。それは放牧のためだ。現在クルマ、オートバイを買った世帯が多くなったが、うちの家計にはそんな余裕がなくて、1台もない。今でも、ウマはわれわれ牧民にとって欠かせないものだ。山の中あるいは山頂へ、はぐれた家畜を探しに行く時、またクルマでいけないところへ行くことは、ウマしかできないからだ。だが、馬は昼夜を問わず、牧草を食べ続けるので、牧草の需要量は大きくて休牧時期はたいへんだった。

うちは、以前と同じヒツジの皮で蔵袍を作っている。現在、とりわけ夏の時、天気が比較的暖かくて、漢服(漢族の衣服をさす)は蔵袍より軽くて、また涼しく感じるので、漢服を着る人が増えた。だが、われわれ牧民、とりわけ私たち女の人たちは、夜起きて搾乳するとき、蔵袍のほうがすきだ。それは、蔵袍が保温できる一方、湿気も隔てられるからだ。うちの子どもの蔵袍は4、5歳になってから作り始める。蔵袍はすべて自家の家畜皮でつくったもので、一般に男女同じであり、普通の身長の人蔵袍は7枚の成年ヒツジ皮、あるいは40~50枚の仔羊皮が必要なため、ヒツジの皮はあまり売らないのだ。

以上の事例に示したように、定住による遊動という生活様式の変容に伴い、いわゆる家畜をめぐる生活様式にもしだいに変化が起こってきた。それは、単なる家畜の割合、種類の変化のみならず、牧民の、家畜に関する利用、管理にも変容が見られるようになったのである。

家畜構成からみれば、二つの村の農家においては、いずれも変化が起こったが、A村より、B村のほうがそれほど深刻ではなかったことがわかる。事例1と2に示されているように、A村の農家は、いずれも従来の4種類の家畜が、すでに1、2種類に変化しつつある一方、家畜に属していなかった豚までも飼育し始めるという現象がでてきた。一方、B村の農家には、例3と4のとおり家畜数の減少や種類の減少がみられるが、A村ほどの変化に至っていなかったといえる。それでは、こうした異なった家畜構成の成立に至る各農家の適応や選択理由についてみていこう。

事例でみたようにA村の定住は、いわゆる家畜を売りきって、定められた地域での定着的な生業、定着的な生活を指し、遊動的な生活の完結を意味する。牧民は、主に補助金や冬虫夏草の収入でこれからの生計を立てようという考えのもとで、生活し始めた。しかし、現実予想と違って、生計を立てられずに、他の産業の構築を余儀なくされた。それゆえ、牧民は生計のために新たな生業の成立に、事例1と2でみせたように第一に考慮したのが再びこれまで生活の相手としてきた家畜を飼育していくことである。

だが、それは簡単な作業ではなく、経験がないが、それとも経済的な理由であきらめたり、あるいは失敗しながら、飼育する家畜の選択を繰り返している。選択は、放牧時期とは違って、草地の生態環境や家畜の役割などに全く関係せず、いずれも畜舎飼育できるか否かにその第一の理由が限られている。そのゆえ、「乳牛を飼いたい、経験がなく、代わりにヤクを飼いたい、畜舎に入れられない」という事例1のように、ヒツジは選択の主要対象となった。しかもヒツジのほかに選択肢がないのも事実であろう。なぜなら、それは牧民の第二の選択理由——伝統的慣習につながっているからである。

すなわち、ヤクとウマが畜舎に入れられないので、残ったのはヒツジとヤギしかいない。だが、事例1でみた——豚肉に慣れず再びヒツジを飼うことにしたように、チベット族牧民は牛乳しか飲まず、ヤギ肉は食べない習慣がある。したがってヒツジは、生計をたてるのに重要な役割を果たしうる一方、食生活に肉も供給できるため、しだいに選択対象になってきたのである（5章の事例5のような、ヤギばかり飼っている農家の存在も否定できないが、それはあくまでも経済的余裕がなく、他の家畜を買えないということによる）。

これに対し、B村の牧民も定められた地域に定着しているが、その実態はA村とは異なる。家畜を徐々に減少させるという季節的休牧のもと、定住地で数ヵ月暮らしていくことがあっても、基本的に放牧行為は依然として存続しており、草地も利用されている。それゆえ、家畜の選択においてA村の農家と違ったケースをみせている。いわば遊牧行為を満たす家畜である。

それは、従来のような、家畜の役割や家畜に関する利用性を指している。事例3と4にみられるように、ヤクは乳や肉が得られると同時に、移動の際の荷物運びなどヤクに頼むしかできない利用性がある一方、ウマは、遊牧時期にクルマやオートバイが果たせない役割を有している。そのため、ヤクとウマは畜舎に入れられないが、事例3と4のように、牧民たちはどんな厳しい状況にあっても、遊牧生活に欠かせないヤクとウマを残している。

それと対照的なのは、B村の2つの事例がいずれもヤギの減少もしくは、飼育しないことを示していることである。これについて牧民の話によれば、ヤギの習性により家畜飼育がなかなかできないことがその理由である。だが、ヤクとウマの選択と比較してみれば、そういった理由よりは、むしろヤギはもともとこれまでの遊牧生活と生産において、単に群の先頭をいくヒツジ（群れの道案内という役割を果たす）とされ、重要な役割を果たしていなかったほか、チベット族牧民の食生活の供給対象にもなっていなかったからだと考えられる。言い換えれば、ヤギは以前にせよ、現在にせよあってもなくてもよいという家畜対象とされているのである。

したがって、二つの村における家畜構成の差異は、牧民の選択意識によって構築されてきたものである。こうした選択意識の決定は、あくまでも遊動という生活様式が存続しているか否かが、前提となっている。

いうまでもなく、以上の変化、とりわけ家畜の種類減少は、牧民の家畜に関する利用にも大きな影響を与える。例えばヤクを飼っていない農家は牛肉や乳、ソコなどが得られない。実は、利用対象とする家畜が存在しても、遊牧を完全にやめたA村の牧民のほうは特にヤクの毛を利用してテントを作ったり皮で放牧用の道具を作ったりする必要がないのも事実である。

にもかかわらず、事例2に示したようにこの変化は、これまで数世代にわたって維持されてきた伝統文化・習慣にも影響を及ぼした。これまで民族の独特な文化、誇りとされ、しかも生活に欠かせない民族服「蔵袍」は、定住生活に適應していく中で、次第に着けたくないものになりつつあった。実は、筆者がA村で調査した時、わずかに年取った人のみが「蔵袍」を着ていた。近くの民族学校には、「蔵袍」を着た人は1人もいなかったのである。

だが、A村に対し、B村の多くの牧民は依然として「蔵袍」を着続けている。その理由としては、事例3の世帯主の話が最も適切であろう。いわば、遊動的な放牧を行う限り「蔵袍」は生活や生産と切っても切れない関係に位置付けられているのである。言い換えれば、対照となる、事例2と事例3のように、「蔵袍」が存続できるかどうかは、遊動的な生活がまだ存在しているのか、あるいはテントで住み、野外で搾乳をしているか否かにかかっている。

その一方で、4つの事例でみたとおり、B村のような、家畜を駆ってどこかへ放牧する時の家畜の確認や種畜の選択の様子は、A村ではもう見られない。とはいえ、これまで続けてきた、家畜群構成の維持や日常生活の成り立ちにつながっている去勢は、今でも2つの村において存続しているのである。だが、B村の農家における去勢や種付けはやはり昔と同じ、群構成や群の秩序及び日常生活の成立に基づいたものであるのに対し、A村のほうは、商品効率や人々の食の好みに基づいたものであるといえる。

A村において、去勢を行わない農家が存在するが、それは去勢しないというわけではなく買ってきたヒツジはほとんど去勢されていたからである。だが、去勢してもそれはB村とは異なり、「しないと売れない、売れても値段が下がる」と牧民が言うように、市場への投入率あるいは商品効率を目指しているのである。そのためにこそ、牧民は人力や時間や経済的な節約を目指して、去勢が必要な仔家畜を飼いたくないのである。したがって、それは従来の生活必要品の交換を満たす、あるいは家畜構造の維持とは全く違って、質的な変化をもたらしたのである。

これまでみてきたように、定住といっても定住タイプの違いにより、家畜構成や利用及び管

理という生活様式の変化は、かなり異なっている。上述のように、いわば大きく変化したA村に対し、B村のほうは、ある程度従来の様子を維持していると考えられる。もちろん、B村であってもこれまでみてきたように、ウマとヤクの場合は、季節的な放牧のほかに、少なくとも親戚であっても、他農家であっても、一時的に放牧できる草地も必要となる。

要するに、従来の家畜構造、家畜をめぐる利用、管理などの生活様式の存続は、一部の食生活の肉や乳の自家消費という生活様式とは異なり、単なる家畜の存在のみならず、少なくとも季節的放牧であっても、遊動生活の存続が必須条件となっている。

5 簡素的な食生活とその変容

5-1 伝統食生活の成立と家畜の位置づけ

ハリスは、食の人類学の視点から文化の差異と民族的個性について「世界各地の料理に見られる違いは、大部分、エコロジカルな制約と条件に理由を求められ、その制約と条件は地域によって異なる。例えば、肉食中心の料理は、比較的低い人口密度、作物栽培に不向きか必要としない土地に関連がある」¹⁴と指摘している。

ハリスの指摘は、青蔵高原で暮らしているチベット族牧民の食生活から裏づけられる。「生命禁区（無人区域）」と呼ばれる青蔵高原の牧畜区は、平均標高が4,500mで、年間平均気温が-4となり、1年中雪が降り続くことも珍しくない。こうした生存環境と物質条件によって築かれた牧民の伝統的食生活は、畜産品のほかには、厳寒に耐える農作物しかない。それは、主に肉、乳、そして裸麦を原料とするツアンパを指す。総じて言えば家畜のいずれの部分も利用する簡素な伝統的食文化である。

さて、肉類にせよ、乳類にせよ、すべて家畜から獲得するのは基本である。肉類は、一般に煮た「手抓肉」と乾かした「風乾肉」を指す。「手抓肉」は、骨付きヤク・ヒツジ肉のかたまりを塩ゆでしただけであるが、その火加減の具合から、女性たちの腕前がみてとれる。一般骨付き肉をなべにいれて強火で沸かした後ちょっと煮てから、肉を出して食べる。それは、肉の鮮度を保つ一方、肉の栄養分を残すためである。

そのため、肉はまだ柔らかく煮ていないので、みんながナイフで切って食べる。だが「牛肉は肋骨の肉、羊肉は胸と尾の肉」といわれるように、多くの世帯は、肉の高級品とする部分を保存し、お客さんを招待する肉としている。

「風乾肉」は牛肉を中心とした、冬春時期に食べる伝統料理である（ヒツジは、骨についた肉が少なく、乾かすと食べられる肉はあまりないから）。骨から肉を細長く削りとって、麻袋に入れるか、それとも針金で刺して風通しのよい日陰あるいは貯蔵室に吊しておく。冬季にわたって肉を風に晒し、寒気に凍らせ、そのまま引き裂いて食べる。

「風乾肉」は、一般に、翌年の夏まで食べられる。高原地域の牧民にとって、この時期は食物がしばらく欠乏する状態にあるので、「風乾肉」は冬季から夏にかけて、日常生活に欠かせない食物となる。しかも牧民たちは、放牧やどこかの遠いところへ行くとき、必ずこの肉をもっ

14 マーヴィン・ハリス『食と文化の謎』、坂橋作美訳、1988年、岩波書店、p.6。

ていく。

一方、内臓の整理は、通常腸から始まるが、腸内に注ぎ込んだ水を抜き出す力の強さに注意を払う。弱かったら水が出ないが、強かったら腸内についた油脂が抜き出されるからである。腸料理とは、ほとんど腸詰を指す。小麦粉（あるいはツアンパ）と塩及び血を混ぜた糊状のアンで詰め込んだのは、血腸（血の腸詰、調査地でジェナーケイと呼ぶ）と呼ばれる。詰め方は、手で一端を広げ、もう1本の手の指でアンを、腸の7～8割ぐらいまで詰め込んだ後、細いヒツジの腸で両端を締めるのである。

最も難しいのは血腸を煮ることである。腸詰を湯にいれて、繰り返し繰り返しひっくり返ししながら、空気が膨張したところを、針で刺し空気を排出する。そして、刺した穴から出てきた汁の色がピンクになれば、血腸を湯から取り出してよい。その時の血腸はまだ半熟で、血も生煮えのままである。牧民の話によれば、半熟の血腸は年取った人や、産婦及び患者など、体が虚弱な人々にとって体の保養に一番よいという。

腸詰には、アンの違いにより、ひき肉を塩、油脂と混ぜた肉腸（チガン）、細かく切った肝臓を、塩及び油脂と混ぜて十二指腸に詰めて作った肝腸（ゴウレモ）があるほか、食道に詰めた（モカイバ）もある。

そして、胃袋を洗う際に肉を損ねない一方、胃袋についた油脂も残す必要があるので、力の加減は非常に重要である。胃袋を料理する時は、一般に適当な大きさを何枚も切って、その上に混ぜたアンと油脂を載せ広げてから、ヒツジの腸で包んで煮る。

その一方、食道を通して、ヒツジの肺臓に溶かしたソユを入れて煮る食べものがあるほか、ヤク・ヒツジの頭と蹄もチベット族牧民の食物の1つになる。蹄は、一般に膠状までとろ火で煮込んで、皮ゼリーにする一方、ヤクの頭は火で焼いてから、毛を取り除く。そして口から横に切り分けて煮る。ヒツジの頭はそのまま鍋に入れて煮る。煮てから毛を抜き取り、口から2つに切って食べる。一方、食べ残ったヤクの頭骨は、通常屋上や湖のそばあるいは峠などにおかれ、ヤク崇拜のシンボルとなる¹⁵。

さて、チベット族のトーテミズムといえ、ヤクのみならず、ヒツジやイヌ及びウマなども含まれている。だが、日常生活からみれば、同じトーテミズムの対象としていても、ヤク・ヒツジは食肉の主要源とされるに対し、イヌやウマを食べることが禁止され、1つのタブーとなっている。これを理解するには、ハリスの「人間にとって、ある動物種が、生きている限りいろいろな役に立ち、それは、死体、肉になった場合の価値を、大きくうまわれれば、この種の動物は人間に食べられない」¹⁶、という指摘が、1つの手がかりとなると考えられる。

すなわち一種の動物が人間に食べられるかどうかというのは、この動物が人間に、肉以外の物を提供できるか否かにより決定される。言い換えれば、イヌやウマを食べるという文化は、

15 ヤク崇拜は、チベット族信仰中の一種として、主にチベット北部の安多地域に存在している。その表現はチベット仏教（例えば、護法金剛神はヤクの頭がつく力士となる一方、寺院の祭りにもヤクトーテムの踊りがある）にみられるのみならず、日常生活にもよく現れている。牧民はヤクを神様だと認め、屋上や庭壁の角、湖と道路のそばあるいは山の峠などにヤクの頭骨（経あるいは太陽、月、火などの図案が彫り付けられる頭骨もある）を置き、経幡（ジフン）を掛けたり経を読んだりしながら、家と家畜の安全、家族の健康など様々な願いを伝えている [林1993：84-88]。

16 マーヴィン・ハリス 『食と文化の謎』、坂橋作美訳、1988年、岩波書店、p.228。

生活に必要な食肉を提供する資源の欠如にある。遊牧の生業を営む中で食肉を供給する他の動物資源が豊富である一方、イヌが野獣の襲撃を防ぎとめ、放牧を助け、ウマも地理的あるいは自然の様々な困難の克服に重要な役割を果たしているため、食の範囲から排除される。

肉類のほか、乳類も食生活の重要な構成部分である。それは、主にヤク乳と、女性たちが搾乳時期にヤク乳で作ったソユ、ヨーグルト、チュラなどを指す。そのなかで、チュラ¹⁷は一般に、一種の薬味として、ツァンパなどに入れて食べる一方、ヨーグルトも暑気を払い、渴きをいやし飢えをしのぐ効果があるので、放牧に戻ってきた牧民は、通常テントに入ってからヨーグルトを食べ、1日の疲れをとる。

さて、日常生活の中で最も重要、かつ広範に用いられているのはソユである。ソユ（ヤクの乳から分離したバター）は、新鮮なミルクをヒツジの皮袋にいれ、揉みながら揺り動かすか、あるいは専用の桶にいれ、中の棒でミルクを引き上げたり下げたりするようにしてつくったものである。季節ごとに作ったソユの色は異なり、夏が黄色で、冬が白色となる。

ソユは、一般に主食とするツァンパを練るときに必ず使う一方、主要な飲み物であるソユ茶もソユを中心としたものである。その上、お菓子を揚げる油もソユであり、寺院や仏教活動に使う「酥油灯」¹⁸の灯油及び「酥油花」¹⁹をつくる原材料などもソユである。また、チベット医学における調剤や製薬もソユが不可欠といわれている。

ソユ茶は、乾燥地域に失われがちな脂肪分と塩分を効率的に補給でき、暖もとれるため、牧民が良く飲んでいる。ソユ茶のほか、乳茶やお茶も牧民の日常の飲み物となる。いずれも茶葉を長時間煮てつくったものである。牧民は茶を飲むなら、酸素が補充でき、寿命も延ばせるといふ。こうした効果があるかどうかは別として、筆者は調査の時、風が強く気温が低く乾燥した牧畜地域では、人々が熱いソユ茶を飲むことが非常に都合がよいことを実感した。

だが、茶を飲む際に、注意しなければならないのは、飲み方である。農家の主婦や娘はたびたびみんなの茶碗をみて、すこしでも飲んだらすぐまた入れてくれる。こうした習慣を知らずに、つい飲みすぎてお腹が膨らんでしまった人は少なくなかったという。一般に、経験者はちょっとだけ飲んでそのまま置き帰る前に一気に飲んでしまう。

調査地の牧民は、自分の食生活を「朝食はなめる、昼食はかき混ぜる、夕食は食べる」というようにまとめている。なめるのは茶を飲むことを指す一方、昼食は、ソユ・乳茶にツァンパをいれてかき混ぜて食べる。そして夕食は、通常小麦粉で作った麺類（例えば面片²⁰）を食べる。だが、麺類といっても、肉や、肉スープも欠かせないほか、日常食の肉まんじゅうのアンも、たっぷりした肉と油脂に、わずかに白菜を加えたものである。牧民の話によれば、ご飯は主にお客さんを招く時、食べるものだったが、筆者の3回の調査でご飯を食べる場面は一度も見られなかった。

一方、チベット族牧民の食生活で最も少なかったのは野菜の摂取である。近年、とりわけ定住地で野菜を植え始める農家が存在するように、野菜を食べ始めた牧民も珍しくないが、それ

17 「ネザ」とも呼ぶ。それは、ソユを分離して残った汁（タラ）を糊状までに煮て乾かしたものである。

18 「酥油灯」は、ヤク乳から作ったソユを灯油にしたチベット族の伝統的な明かりである。

19 「酥油花」は、ソユを使ったチベット族の伝統工芸である。

20 水でねじった小麦粉を、手で爪の大きさにして肉スープに入れて煮たものである。

は単に個人、とりわけ子どもの好みを満たすのに限られているといえる。筆者は、調査の終わった当日、世話になった1人の牧民を近くの料理店に招待した時、おかずをおいしく食べている筆者をみて、彼が「野菜なんか草だよ、それはヤク・ヒツジの食べ物だ。アンタどうしてそんなにおいしく食べてるのか。人間だろう、だから肉を食べるよ」といわれたように、今でも、牧民は野菜が食物だと考えていない。

彼らの食生活に関して李は「彼らの飲食行為は、薬が病を治すと同じ、ただ飢えをなくすためのみである。彼らは、毎日食べ続けている食物に、いかなる享受を求めるとかは考えていない。それは確かに不思議だと思われる。が、それは事実だ」²¹と述べている。

すなわち李は、われわれが(少数民族)チベット族の食生活の特色が理解できない事実あるいは非合理的また原始的なものとしてされる現実を指摘している一方、彼らの食は、われわれの、食物に求めている享受の基準とは異なり、生存を満たすのが前提とされることを述べている。

要するに、これまでみてきたように、高原で遊牧業を営んできたチベット族牧民の日常の食生活は、非常に簡素である。それらは基本的に家畜の肉と乳に基づいたものである。いわば家畜こそが食生活を成り立たせている。

5-2 食生活に見られる変容

上述のように、チベット族遊牧民の食というのは、遊牧という生産・生活に適応し、栄養分・脂肪・タンパク質の含有量が高く、かつ携えやすく、変質しにくい食べ物である。それらは主に家畜によるものである。それゆえ、家畜は彼らの食生活の成り立ちには欠かせない位置にある。だが、4章でみてきたように、定住化の実施に伴い、遊動的な生活様式が変化しつつあるのみならず、いわゆる相手としてきた家畜も数や種類の減少に至ったのである。したがって、こうした変化は必ず牧民の伝統的食生活に大きな変化を与えかねないと考えられる。このことについて、聞き取り調査資料から具体的事例をいくつか見ていきたい。

事例5) A-3 男, 40歳, 5人家族

うちは貧困な世帯に属する。定住前はうちが家畜をそれほど多く持っていなくて(ヤク8頭; ヒツジ21頭; ウマ2頭)、定住地に来る直前にすべて売れた。2006年から政府の投資(14,000元; 20頭ヒツジ)により、ヒツジの肥育を2回(43頭と20頭)行った。飼料を買うお金がないので、草をあげたヒツジはすべて痩せてしまった。結局600元の利潤しかなく、あきらめた。

77歳の母は体がよくなって、市場で買ってきた豚肉も食べない。しかもうちの2人の子どもは年齢が小さくて、乳とか飲まなければならないので、2007年に20頭のヤギを買ってきて飼養しはじめた。ヤギを飼うのは、まだヤギを飼う人や、ヤギ肉を食べる人はあまりいないので、市場でヒツジよりかなり低い値段で買えるからだ。しかもヤギを飼って、子どもや母は乳を飲む一方、カシミヤも売って家計の補助もできる。

だが、1年に2~3頭を屠っている。以前のような、肉をいっぱい煮て食べることはなかったが、毎食のおかずに入れている。いま、ヤギの肉だけではなくて、市場で買ってきた豚肉を

21 李安宅『藏族宗教史之实地研究』中国蔵学出版社、1989年、p.79。

も食べている。豚肉は通常おかずや麺に入れるだけなので、すぐ食べきれない。うちは鶏をも飼っている。それは主に子供の食肉となっている。現在、ヤク乳ではないが、乳はちゃんと毎日飲める。

事例6) A-4 女, 49歳, 6人家族

うちは、いま4頭の乳牛を飼っている(2頭は政府が買ってくれた輸入品;他の2頭は自分のお金で買った黄牛)。牛の品種が異なるので、従来ヤクの搾乳は1日1回だったが、現在1日2回の搾乳を行う。乳の量もヤクより多くなった。ヤクは1キロ/頭・日ぐらいで、現在は平均3~4キロ/頭・日ほどだった。

飼っている乳牛の数はそれほど多くないが、乳は自家の食べる分以外余っている。余った乳は、ヨーグルトをつくるが、たまにソユも作っている。だが、ヤクの乳量よりは多くなったが、乳に脂肪の含有量が低くて、出てきたソユも少なく、おいしくない。なので、ヨーグルトをつくる。つくったヨーグルトは、うちの子が持って行って村で売っている。

肉は通常市場で買っている。あまり余裕がないので、豚肉も食べている。家族でまだ遊牧している農家がいるので、ソユと肉は、あっちから多くもらっている。もちろん、新年や祭りの時うちも家畜を買って屠っている。その数量は放牧の時と比べものにならない。それは、主に家計のせいで、そんないっぱい家畜が買えないのだが、今は、放牧の時のようにそんな多くの家畜を屠っておく必要もないからだ。お金があれば、いつでも肉を買えるし、しかも誰もいつでも家にいる。草地の中とは違って、どこかへ行く時、料理店がいっぱいあるので、食べに行ってもよい。飢える恐れはないからだ。

とはいっても、従来の「風乾肉」が好きだ。もうその味に慣れたかも。今でも放牧している家族から少しもらっている。主人やうちの子も好きだっていっている。

事例7) B-3 女, 51歳

うちの食生活は特に変わっていないと思う。変わったといえば、たぶんここに来てから、以前より野菜を食べる機会が多くなったということだ。野菜は野菜の販売車から買ったこともあるが、うちの庭で白菜と大根も植えている。

うちは、以前と同じ毎年11~12月の間に「冬宰」を行っている。去年、7頭のヒツジ、2頭のヤクを屠ったが、今年もそのぐらいだと思う。ヤク肉は一部を煮て食べたが、大部分は風乾肉にした。ヒツジ肉は主に新年に向けての準備だった。もちろん時々新年の直前にヒツジを屠っている。

冬宰で屠った家畜の数は、以前と比較すれば、かなり少なくなった。それは、まず飼っているヤクが以前より少なくなって、母ヤクが多いからだ。そして、いま、1年のうち、数ヶ月しか草地で放牧していないうえ、冬の時期、ヤクを駆って放牧に行く人は主人と1人の子だけ、ほかにだれも行かない。なので、従来のように、多くの風乾肉を準備するという必要はなかった。これは、準備しなくてもよいというわけではない。放牧の日数は以前より少なくなったが、草地のあちこちへ絶えず移動している。しかも今の放牧は暖かい季節に限られているので、その時、草地で家畜を屠れば、少なかつたら足りなくなり、多ければ数日経つとすべて臭くなる。

また「風乾肉」を食べたら、飢えにくく、主人などは放牧やどこかのところへ行くとき必ず持っていくのだ。もちろん、いま草地で屠るときも持っている。

ヤクより、ヒツジはさらに多く屠る必要がないんだ。以前、家畜はすべて草地でそのまま放して牧草を食べさせていた。冬になると、気温が低くなるにつれて、牧草も枯れつつあるので、家畜はだんだん痩せていく。そのため、脂肪がたっぷりついたヒツジ肉を残したければ、冬になっていないうちに大量にヒツジを屠らなければならない。しかし、現在、冬に通常ヒツジを畜舎に入れて、牧草と飼料をやってあげているので、いつでも肥えている家畜の肉が食べられるからだ。

上の事例でみたように、定住によって、牧民たちがこれまで維持してきた伝統的な食生活に、二つの村ではいずれも変化がもたらされたが、単に食物の種類や食生活をめぐる活動の変化からいえば、A村が大きな変化を経験したのに対し、B村のほうは、それらが存続し続けているといえる。

さて、A村における食生活の変化は、事例5にみられるように、従来食べないあるいは食べたくないヤギの乳や肉、そして従来、食に考えてもない鶏と豚肉は、すでに伝統的食肉に代わって生活の中心的な食物となっている。いうまでもなく、それは経済的な理由によるもので、伝統的食肉を食べたいが買えないし、もし買えれば、これからの食生活のみならず、日常生活に大きな変化を与えかねないので、肉や乳を食べる習慣を満たすにはヤギしか飼えないからだと考えられる。

しかしながら、なぜヤギによって、これまで継承されてきた、肉や乳を食べる習慣を保持せねばならないのか、という点から考えれば、それはやはり、上述のような、遊動的な生活様式の喪失によってもたらされたのだと考えるのが最も適切であろう。言い換えれば、従来の遊動的な生活様式に適應するヤク飼育は、遊動的な生活様式の喪失に伴い、飼育ができなくなった一方、ヒツジ飼育も遊動的な生活様式の喪失により、従来の、そのまま草原に出して天然牧草を食べさせることができなくなった。その代わりに、定住地でヒツジを飼えば特別に乾草と飼料を飼わなくてはならないようになったのである。それゆえ、牧民にとって充分の現金を持つことが必要となるが、現実で、牧民は、お金が足りなくてヒツジを買えないか、それとも、ヒツジを買っても、飼料を買えない状態におかれ、次第にヒツジの飼育をあきらめたのである。それは、事例6をみれば、いっそう明白である。家畜の種類減少により、家畜から牛乳しか供給できない一方、豚肉も買って食肉生活を守っている。ただ異なったのは、まだ遊牧をしている家族がいて、そこから伝統的食肉がもらえるということである。

したがって、A村のような、食生活に起こった変化は、家畜の減少や種類の変化、とりわけ家畜が無くなってきたことにつながっていることが明確である。実は、こうした変化は事例7のB村の農家にもみられる。家畜構成はそれほど大きく変わっていなかったため、特に家畜や肉を買って、食生活を守っていく必要はないが、ヤクを飼養する数の減少は、屠るヤク数の減少をもたらす1つの原因となっている。

筆者の調査時に、夏営地で放牧しているB村の各世帯のテントに入ると、ほとんどの主婦は、ボールに乗せた「手抓肉」を出して食べている一方、こうした風景はA村で全然見られ

なかった。そのみならず、みた限りでは A 村では乳茶を飲んでいる世帯もそれほど多くなく、多くの農家はお茶を飲んでた。

その一方、B 村の農家の食生活にはまったく変化がなかったというわけではない。すでに事例 7 でみたように、放牧時間の縮小や、放牧方式の変化、及びそうした変化による放牧人数の変化により、牧民は、従来の生活に欠かせない「風乾肉」をそれほど多くつくっていないという現状が生じてきた。それは、上で述べたように、家畜の減少につながっているが、それよりは、むしろ事例 7 の話者がいったように、従来と異なり、現在の放牧生活には大量の家畜を屠る必要はなくなったということである。

これは、事例 6 でもいえる。すなわち、もうすでに草地間を牧草や水の状況に対応しつつ移動する機会がなくなったので、従来の遊動生活の成り立ちに欠かせない食物である「風乾肉」は、定住によりその役割を失ったのである。しかも、現実の生活の中で、いつでも新鮮な肉を買って食べられるので、食卓から徐々に失われている。もちろん、事例 6 のように、今でも「風乾肉」を他の家族から少しもらって食べ続けているが、それは、単なる個人の好みとなってしまう、事例 7 のような、伝統生活・生産のためのものとは全く違っている。

したがって、定住に伴うチベット族牧民たちの食生活の変化は、家畜の構成あるいは家畜構成の変化につながる一方、それ自体の存続は、遊動的な生活様式がまだ続いているか否かに深く関係しているのである。

6 結語 定住化と生活様式の存続

本稿では、ここまで遊牧民の生活様式を遊動的な生活様式と家畜をめぐる生活様式に分けて、両者の相互依存の關係に焦点を当て、定住化による前者の変化に伴い、後者がいかなる変化をこうむってきたのかということについて検討してきた。みてきたように、遊動的な生活様式の変化に伴い、家畜をめぐる生活様式は、すでに完全になくなったとは言えないが、大きく変わってしまったことから、家畜をめぐる生活様式の成り立ちは、遊動的な生活様式の存続を前提としている、ということが明らかになったと言える。

遊牧地域は、草地の退化や砂漠化という環境問題に直面しており、それを解消しなければならない。しかしながら、遊牧民を完全に定住化していくことは、理論的には可能かもしれないが、実践面では、牧民がメリットをほとんど享受できず、経済的な貧困や食生活などの不便を余儀なくされている。また、その影響は牧民の生活全般に変化を及ぼし、さらにこれまでの生活様式にも及ぶことがみられた。これまで維持されてきた家畜構成は、割合のみならず種類の減少あるいは種類の単一化に変わりつつあり、従来の家畜類に属さない家畜が増加する現象までもみせている。

問題はそこにとどまらない。家畜をめぐる利用や管理方法、技術あるいは伝統文化は、すでに A 村の牧民が心配しているように、遊動という生活様式が完全に消えてしまうに伴い、失われる可能性が高くなったのである。牧民のこうした伝統技術・文化を、これからいかに維持していくのかは、定住化の策定者のみならず、民族文化に関心を持つ研究者たちにとって重要な課題となる。さもなくば、将来、本や研究論文など文字や写真等でしか遊牧文化に基づいた

生活様式や技術などがみられない日が来るであろう。

参考文献

日本語

松井健

1999 「遊牧の文化的特質についての試論 西南アジア遊牧民を中心として」『国立民族学博物館研究報告 別冊』20：493-515。

松原正毅

1983 『遊牧の世界(上・下)』, 中央公論社。

小長谷有紀

1992 『モンゴル風物誌 ことわざに文化を読む』, 東京書籍株式会社。

1996 『モンゴル草原の生活世界』, 朝日新聞社。

1997 『アジア読本 モンゴル』, 河出書房新社。

2007 「モンゴル牧畜システムの特徴と変容」『E-journal GEO』2(1)：34-42。

マーヴィン・ハリス

1988 『食と文化の謎』, 坂橋作美訳, 岩波書店。

風戸真理

2006 「商品世界からこぼれ出る家畜 社会主義及び市場経済化期のモンゴル国における家畜の個性と意味」『人文学報』93：25-55。

尾崎孝宏

1998 「『現代モンゴル牧民社会の基層的単位に関する研究 スフバートル県オンゴル郡の事例』調査報告」『日本モンゴル学会紀要』29：61-79。

今岡良子

2005 「モンゴルの遊牧社会の変容 資源をめぐる紛争予防の観点から」『IPSHU 研究報告シリーズ』35：69-89, 広島大学平和科学研究センター。

韓霖

2009 「民族文化と開発の矛盾——青海省におけるチベット族の事例を中心として」鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科『プロジェクト研究報告集』6：13-26。

2010 「中国における遊牧民の定住化に関する考察——青海省におけるチベット族の事例を中心として」『地域政策科学研究』7：105-125, 鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科。

中国語

苏发祥

2009 『安多藏族牧区社会文化变迁研究』, 中央民族大学出版社。

邢海宁

1994 『果洛藏族社会』, 中国藏学出版社。

苗凡卒

1994 「冬宰——藏北草原的黄金季节」『中国西藏』1：17-19, 中国西藏杂志社。

G. A. Combe

2002 訳書名『藏人言藏：孔贝康藏闻见录』, 邓小咏译, 四川民族出版社。

南文渊

2002 『高原藏族生态文化』, 甘肃民族出版社。

丛刊编辑组编

1987 『藏族社会历史调查』(三), 西藏人民出版社。

李安宅

1989 『藏族宗教史之实地研究』, 中国藏学出版社。

林继富

1993 「牦牛与藏族原始文化」『西藏艺术研究』2: 84-88。